

4月22日の礼拝メモ

## 『イエスから遠く離れてしまう心と堅く結びつく心』

マタイの福音書 15:21～28

ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。

### 序]

1～20節までにパリサイ人らとイエスが議論しておられることが記されている。パリサイ人は神との特別な関係にあると考えられていながら退けられ、カナン人の母は異邦人ゆえに神から離れているとされていたが祝福された。それは彼女が「礼拝の心」をもって主に近づいたから。礼拝の心とは、神を神とし、人間である自分の立場を棄えていること。今朝は両者を見比べながら学びたい。

### 本]

#### I イエスから離れた心(1～20)

パリサイ人は、手を洗うことに代表される“言い伝え”の方を神の戒めよりも重く見て、そうしている自分たちが神に近い存在だと自負していた。汚れは外から入ってくるのだから、外側をきよめればよいという彼らの考えは日本の神道に似ている。イエスは「汚れは内側にもっているもの」とおっしゃり、内側の「心の中にあるもの」のをリストにされた。(18～20) 我らは、人間は元々きよいのだという性善説に立った安易な楽観主義に走らないで、もっと物事の本質を見なければならぬ。心の汚れがきよめられることが「救い」。

#### II イエスに結びついた心(21～28)

カナン人の女性は異邦人でありながら、最初から「礼拝の心」をもってイエスに近づいた。「主よ。ダビデの子よ。」との叫びはイエスをただの偉人ではなく、神として崇めていたことを示す。おそらくこの一言でイエスは、彼女のような信仰者であつたら最後まで食らいついてくるだろうと思われて、敢えて無視するような態度を取られ、弟子たちに信仰とは何かを教えようとされた。「小犬」という言葉をそのまま受けて、彼女は「私は犬に過ぎません。子どもさんへの食べ物を最初に頂こうなどと考えているのではありません。恵みのおこぼれで結構です。あなたほどのお方のおこぼれならば、それを頂ければ家にいる娘は癒されます」と告白し、見事に癒しを体験した。

### 結]

- ①パリサイ人の固執した「言い伝え」と同じように、「自分の考え」に固執して俺様が神様だという不敬度な思いは捨てよ。
- ②カナン人の女性にそうされたように、我らの信仰も試される。
- ③けれども、イエスに食らいついて離れない信仰を持とう。神のお言葉だけを信じて前進しよう。